

鹿児島県における音楽療法研究会活動

—音楽療法研究会「日々輝」20周年を機に振り返る—

中 村 ますみ

1 はじめに

筆者が代表を務める音楽療法研究会「日々輝」が昨年20周年を迎えた。鹿児島の地で、共に学ぶ場を求めている5名の音楽療法実践者で、2001年に立ち上げたものである。この20年の間に、日本における音楽療法の認知度は高まったと言えよう。その一方で、一時期のブームは去り、その置かれた立場も変化してきた。本県における音楽療法の動向と本研究会の活動を振り返りながら、その意義や地域で果たしてきた役割、そしてこれからの研究会が目指すべき方向性について考えてみたい。

2 日本と鹿児島県における音楽療法の歩み

1960年代後半から、加賀谷哲郎による「日本音楽療法協会」(1969)、山松質文による「ミュージック・セラピー研究会」(1969)、松井紀和による「日本臨床心理研究所」(1977)が設立され、これらの研究組織の下で、現在日本の指導的立場にある多くの音楽療法士や研究者が生まれていった。ジュリエット・アルヴァンやクライブ・ロビンズ夫妻の来日も大きな影響を与えたとされる¹が、これらはすでに音楽療法の教科書の中で学ぶような出来事であり、この頃の鹿児島で、音楽療法の実践あったのかなかったのか知る手段はない。本項で述べる内容、特に鹿児島県における音楽療法については、筆者の体験とそれらに派生することが中心であることはあらかじめお断りしておきたい。

岐阜県に音楽療法研究所が開設されることが筆者の古いノートに記されている。この研究所の開設は1994(平成6)年である²から、それより少し前の時期の記録であろう。筆者が「音楽療法」を初めて意識した出来事であったが、この頃日本各地でもすでに音楽療法は大きな高まりを見せていたことは間違いない。1995(平成7)年にそれまでにあった組織が統合されて全日本音楽療法連盟が設立され、1997(平成9)年に同連盟の音楽療法士認定制度が開始された。その連盟認定音楽療法士認定規則「前文」によれば、「(略)各人各様の試行錯誤に任されていたため、いろいろな偏りや誤解を招いたことは否めない事実でした。(中略)全国組織結成が急務であるという思いがたかまり…」³とある。

1999(平成11)年には大学及び短期大学の理事長・学長が集い、「協議会認定音楽療法士」(1種、2種)を養成することを目的に全国音楽療法士養成協議会が設立された。2014年3月に廃止された鹿児島国際大学短期大学部の前身鹿児島短期大学音楽科も、設立から会員校であり、初代会長は当時の三木靖学長が務めた。2001(平成13)年、鹿児島国際大学短期大学部と改称され、キャンパス移転を機に、音楽療法コースが開設された。この準備段階として鹿児島短期大学では音楽療法の特別講座が催され、参加者の間で県内に養成校ができることに大きな期待が寄せられており、当時、筆者もこれらの講座の受講者の一人であった。

¹ 村井靖児『音楽療法の基礎』音楽之友社 1995

² 岐阜県音楽療法研究所監修『「音楽療法」ある軌跡』2000 中央法規出版

³ 小松明・佐々木久雄『音楽療法最前線・増補版』1996 人間と歴史社

表1 日本全国と鹿児島における音楽療法の動き

年	日本及び他県における動き	鹿児島における動き	
1969 (S. 44)	日本音楽療法協会（加賀谷哲郎）		
	ミュージック・セラピー研究会設立 （山松質文）		
	ジュリエット・アルヴァン来日		
1977 (S. 52)	日本臨床心理研究所設立（松井紀和）		
1984 (S. 59)	クライブ&キャロル・ロビンズ夫妻来日		
1987 (S. 62)	東京音楽療法協会設立（村井靖児）		
1994 (H. 6)	岐阜県音楽療法研究所開設		
1995 (H. 7)	全日本音楽療法連盟設立 （初代理事長：日野原重明） 宮崎音楽療法研究会発足		
1997 (H. 9)	全日本音楽療法連盟音楽療法士の認定開始		
1998 (H. 10)	JASRAC音楽療法支援事業開始（～2005）		宮崎音楽療法研究会にて鹿児島県内の精神科における音楽活動の事例が発表される
1999 (H. 11)	全国音楽療法士養成協議会設立 99音楽療法全国フォーラムinみやざき開催		県内でいくつかの研究会が発足してはすぐ解散が繰り返される。
2000 (H. 12)	音楽之友社『チャレンジ！音楽療法士』を刊行 『チャレンジ！音楽療法士2003』まで継続		
2001 (H. 13)	日本音楽療法学会設立		鹿児島国際大学短期大学部音楽科に音楽療法コース設置 （全国音楽療法士養成協議会認定音楽療法士2種養成開始）
	兵庫県音楽療法士認定初年度（現在も継続）	音楽療法研究サークル「日々輝」発足	
2002 (H. 14)	日本音楽療法学会第1回学術大会開催		
2003 (H. 15)	ONTOMOOK『theミュージックセラピーvol.1』 （以降、年に2～3回刊行）	「日々輝」サークルから研究会に名称変更 日本音楽療法学会「講習会等開催団体」として登録される（県内初）	
2007 (H. 19)		鹿児島国際大学短期大学部音楽科全コース撤廃（ワンフロア）全国音楽療法士養成協議会1種養成開始	
2009 (H. 21)	日本臨床心理研究所第34回をもって 音楽療法セミナーを終了		
2010 (H. 22)		音楽科にあった音楽療法士養成課程を情報文化学科に移設	
2011 (H. 23)	日本音楽療法学会認定制度暫定期間終了		
2014 (H. 26)	岐阜県音楽療法研究所認定制度終了 ONTOMOOK『theミュージックセラピーvol.20』で休刊 宮崎音楽療法研究会解散	鹿児島国際大学短期大学部閉鎖（音楽療法士養成終了）	

また筆者は、山梨県の日本臨床心理研究所（松井紀和所長）におけるセミナーやワークショップにも参加していた。当時のこのセミナーは、日本の音楽療法界で活躍する名だたる方々が集まる場であり、熱気に溢れていた。このセミナーで知り合った研究者たちに大きな影響を受けたことは、何にも代えがたい財産である。さらに、隣県の宮崎の研究会にも出かけていた。宮崎ではすでに研究会が1995（平成7）年に発足されており、鹿児島から足を延ばして勉強する人たちも多くいた。この研究会の事例検討会において、初めて鹿児島のグループが精神科における音楽活動の実践を発表したのは1998（平成10）年のことである。鹿児島県内において音楽療法の熱を感じることはなかったが、こうして県外で知り合った仲間との間で、「鹿児島にも研究会を…」と望む声は聞かれるようになっていた。実際に県内に研究会は発足され、筆者もそこに籍を置いたこともあったが、ごく短い期間で解散を繰り返したり、他でも発足したと噂を聞いたり、ある種混沌とした時期であった。

すでに県内には連盟（学会）認定音楽療法士を目指す人も出てきており、皆学びたい意欲に溢れていた。筆者は山梨のセミナーの講師陣に認定の申請を勧められることもしばしばあったが、当時は特別支援学校の教員で、認定を目指すことに大きな価値は見いだしてはいなかった。音楽療法を学び、それを基に授業実践における生徒たちとの音楽活動を研究することがただただ楽しかった。仕事と家庭・育児の両立に余裕のない時期でもあり、そこにかかるエネルギーはなかったというのが正直なところである。自ら研究会を立ち上げようと考えたこともなく、誰かが催してくれる研究会で、受講する立場で学びたいと思っていた。

2001年全日本音楽療法連盟は再組織化され、日本音楽療法学会となった。学会発足の熱を受け、鹿児島県内にも自分たちで学ぶ場が必要、と筆者自身が考えるようになるには時間を要さなかった。山梨のセミナーにおける講師陣から、鹿児島においても音楽療法の発展に尽くしてほしいと、個人的に話をいただいたことにもよる。先述の通りそれまで筆者は自身が中心になる必要はないと思っていたが、県内の音楽療法の現場獲得の紛擾やそれによる確執もあり、その影響のない立場（特別支援学校教員）である筆者による呼びかけが良いのかもしれないとわかに考え始めたのである。2001年8月、すでに県内で音楽療法実践をしていた気の合う4名の仲間に声をかけ9月に発足会をもった。翌10月、研究会ではなく、控えめに音楽療法研究サークル「日々輝」と名乗って活動を始めた。代表は置かず、発足メンバーで必要に応じて話し合いながら進め、事務局は筆者が担当していた。この研究サークル発足後まもなく、筆者は日本音楽療法学会認定音楽療法士を目指すこととし、2002年度資格審査に合格した。

その後2005（平成17）年、筆者は鹿児島国際大学短期大学部音楽科の音楽療法コース専任教員として着任することとなったが、着任後間もない頃からコース撤廃の議論がなされ、「ワンフロア」の学びにカリキュラム改編する動きがあった。当時、全国の短大音楽科は学生募集に苦戦を強いられ、定員割れの状況であった。幸いにも当時の本学短期大学部音楽科はそういった状況はまだなかったにもかかわらず、先手を打つべきという議論であったと思われる。筆者は「ワンフロア」に向けての高校生向けパンフレット作成の作業を担うこととなったが、その傍ら専攻科において全国音楽療法士養成協議会1種の資格も取得可能にするために、新たなカリキュラム編成作業も開始した。2007（平成19）年、コースを撤廃して希望するすべての学生が音楽療法士養成課程に登録できる、新しいカリ

4 宮崎音楽療法研究会『宮崎音楽療法研究会会誌第13号』2008

キュラムでの養成がスタートした。と同時に2年専攻科において1種の養成も始まったが、当時の2年専攻科の定員はわずか5名であり、その中で音楽療法を専攻する学生が入るのは至難の業であった。2008年～2010年度にそれぞれ1名の学生が音楽療法士1種の資格を取得したのみである。音楽科は2010(平成22)年に国際文化学部音楽学科として改組されたが、その折にはそれまで短期大学部にあった音楽療法分野とポピュラー分野の科目は廃止され、音楽療法養成課程は短期大学部情報文化学科に音楽療法コースとして移設された。

この頃、全国音楽療法士養成協議会総会では、会員校における入学者減少の深刻さが話題にされていた。本学短期大学部で行ったようにコースを廃止し資格のみを残したり、音楽科だけでなく保育科・幼児教育学科といった学科でも取得できるようにと変更したりする養成校も見られるようになっていた。一方、日本音楽療法学会の認定制度においても、臨床経験をもつ一般からの申請を受け付けるとした暫定期間^{注1}を、2008年度をもって終了し(実際は救済措置により、2010年度末(2011年3月)に終了)、学会が認定した養成校の卒業生及び学会が主催する必修講習会を受講した者のみが申請できるとする新制度がスタートした。このことによって、関東・近畿圏で開催される講習会を継続受講することは実質的には不可能であり、鹿児島からの学会認定音楽療法士の誕生は極めて困難な状況となった。この必修講習会も第6期をもって終了することが、2021年2月に通知されている。

音楽科改組後1学科となった鹿児島国際大学短期大学部は2012(平成24)年入学生を最後に募集停止し、2014(平成26)年に鹿児島国際大学に統合された。このことによって、本県における音楽療法士養成所はなくなった。

3 音楽療法研究会「日々輝」の活動

(1) 会員及び定例会

本研究会は積極的に会員を募集することはなく、少人数で行ってきた。すでに述べたように、鹿児島県における音楽療法創成期においては、研究会が立ち上がってはすぐに解散という状況があり、そのことを経験してきた発足メンバーは十分に相互理解の図れる仲間とともにという思いが強かった。また、会員相互の臨床現場に必要以上に関与せず、現場紹介・斡旋などを行わずに、純粹に音楽療法を研究する場とした。特別講座を開催する度に、その受講者に入会を希望する人が現れ、「現場を紹介してほしい」との声もあったが、研究を前面に出したことで入会に至ることはなかった。一時的に籍をおいていた会員は、いずれも養成校を卒業した若いメンバーであった。これらの会員は、結婚や出産を機に休会・退会の措置をとり、研究会活動へ復帰することは今のところない。多い時でも会員は10名強であり、現在は、発足メンバー3名、発足直後の入会者2名、発足後3～5年の入会者2名、近年の入会者1名の計8名である。8名中3名が日本音楽療法学会認定音楽療法士、1名が全国養成協議会認定音楽療法士、2名が特別支援学校教員、他2名も臨床の場を有する。

結成当時は毎月第2金曜日を活動日として定例会を開催し、各会員が輪番制により担当しており、問題提起者として学びたい内容を他の会員に投げかけるという形で行っていた。司会や会場係も輪番制とし、対象の違いや経験の差にかかわらずにそれぞれの抱えている課題を全員で考え、さまざまな試みを行っていた。会員はこの日以外に他の予定を組むという徹底ぶりで欠席者はほぼなかった。この固定したスケジュール制度を変更したり、輪番制での運営をやめたりしてからやや欠席す

表2 音楽療法研究会「日々輝」における特別講座等

* 学会申請講座 (受講証明書発行)

年	月	日	テーマ	*	形態	講師	場所	参加数	備考	
2001 H.13	8		中村が4名の音楽療法実践者に研究会発足を呼び掛ける							
	9	14	発足会						5	
	10	12	第1回定例会 「音楽療法的視点とは」			担当：中村	キャンセ			
2002 H.14	4		会誌第1号発行							
	8	8	公開スーパービジョン(2事例)			鈴木千恵子	キャンセ	10		
	8	9	夏季特別講座音楽療法セミナー 「音楽療法の技法とは」		講義	鈴木千恵子	鹿児島市民文化ホール	39	第1回特別講座	
2003 H.15	1	18	第13回定例会(特別例会) 「障害の重い子どもの音楽と発達」		講義 わらべうた実践	米衛 政光	サンエールかごしま	20		
	2		会誌第2号発行							
	5	24	第2回特別講座 「体験！音・音楽の可能性」		W.S.	山下 恵子	かごしま県民交流センター	59		
	8	24	第3回特別講座 「セラピーから見えるもの」		講義	鈴木千恵子	日高病院	15		
	11		日本音楽療法学会「講習会等開催団体」として登録される							
2004 H.16	2	11	第4回特別講座 「体験！音・音楽の可能性Ⅱ」	○	W.S.	山下 恵子	ハートピアかごしま	50		
	5	24	第5回特別講座 「障害児の音楽療法」	○	講義&W.S.	土野 研治	十字屋クロス	70		
	8	27	第30回定例会(特別例会) 音楽療法士を目指す方のためのQ & A	○	講義	中村ますみ 南谷 朋子	サンエールかごしま	20		
	9	3	第4回日本音楽療法学会学術大会にて登録団体としてポスター展示を行う					川崎医療大学		
	11	6	第1回事例検討会	○	事例検討	鈴木千恵子	サンエールかごしま	15		
	11	7	第6回特別講座 「セッションのプログラミングについて」	○	講義	鈴木千恵子	老人保健施設西千石	25		
2005 H.17	6	11	第38回定例会(特別例会) 「論文・レポートの書き方」	○	講義	田中 京子	伊敷公民館	21		
	11	13	第2回事例検討会	○	事例検討	鈴木千恵子	サンエールかごしま	11		
2006 H.18	3	17	第55回定例会(特別例会) 「高齢者の心理と生活」	○	講義	田中 顕悟	サンエールかごしま	22		
2007 H.19	1	14	第7回特別講座 「音楽療法に取り入れてみたい活動～ ドラムサークルとトーンチャイム～」		W.S.	森田孝一郎 中村ますみ	鹿児島中央公民館	25		
	4	14	第8回特別講座 「音楽療法—音楽はエネルギーシステムである」	○	講義	近藤 里美	鹿児島市医師会館ホール	131	堂園メディアカルハウス	
2008 H.20	9	12	公開スーパービジョン(2事例)						10	

年	月	日	テーマ	*	形態	講師	場所	参加数	備考
2009 H.21	1	31	第3回事例検討会	○	事例検討	門間 陽子	鹿児島国際大学	8	
	1	31	第9回特別講座 「地域での音楽療法の普及を目指して」	○	講義	門間 陽子	鹿児島国際大学	75	
2010 H.22	3		音楽療法の現場で生まれたアイディア集『音楽のごちそう』発行						
	10	2	10周年記念事業 W.S.Vol.1 「さまざまな機能に働きかける音楽活動」		W.S.	中村ますみ 坂中慈子	かごしま県民交流センター スタジオ	27	会員による連続講座
	11	7	10周年記念事業 W.S.Vol.2 「集団の交流を促す音楽活動」		W.S.	中村ますみ 今村 恵子	木ねずみ音楽教室	24	
	12	4	10周年記念事業 W.S.Vol.3 「イメージを広げる音楽活動」		W.S.	中村ますみ 中野 卓代 塩満 梨恵	かごしま県民交流センター スタジオ	26	
2011 H.23	10	2	第10回特別講座 「ノードフ・ロビンス音楽療法の理論と実際～基礎編～」	○	講義&W.S.	濱谷 紀子	鹿児島国際大学	14	
2012 H.24	11	4	第11回特別講座 「ノードフ・ロビンス音楽療法の理論と実際～実践編～」	○	講義&W.S.	濱谷 紀子	鹿児島国際大学	15	
2015 H.27	1	31	共同企画公開シンポジウム 「鹿児島の音楽療法の未来を考える」 「感覚統合の理論を生かして」	○	シンポジウム 実践情報交換会	コーディネーター 中村ますみ	鹿児島国際大学	20	鹿国大 児童相談センター
	4	21	第12回特別講座 「作業療法から見た音楽の特性」	○	講義	宮本 幸	伊敷公民館	9	
	8	23	第135回定例会(特別例会) 「ピア・スーパービジョンの方法と実際」	○	W.S.	中村ますみ	伊敷公民館	11	
2016 H.28	10	9	第13回特別講座 「コミュニケーション障害と音楽」	○	講義	島屋敷英修	伊敷公民館	10	
2017 H.29	11	26	共同企画 「言葉の発達と口腔機能」	○	講義	松元 泰英	鹿児島国際大学	15	鹿国大 児童相談センター
2018 H.30	7	29	第14回特別講座 「代替医療としての音楽療法」	○	講義	山本久美子	伊敷公民館	12	
2019 H.31	3	21	第15回特別講座 「調整的音楽療法(RMT)ワークショップ～音楽を使ったマインドフルネスを体験する～」	○	W.S.	森平 直子	鹿児島国際大学	13	
2020 R.2	2	2	共同企画 「発達障害と感覚統合」	○	講義	井上 和博	鹿児島国際大学	33	鹿国大 児童相談センター
2021 R.3	2	28	第165回定例会(特別例会) 「音楽療法における活動の質を考える」	○	講義&W.S.	中村ますみ	伊敷公民館	9	
2022 R.4	6	26	20周年記念松井紀和特別講演会 「いま一度、音楽療法とは何か？」	○	講義	松井 紀和	児童発達支援センター 「なかま」		(予定)

る会員が出てきた気もするが、それぞれのライフステージにおける家庭や育児の事情もあり、このことが理由と断言することはできない。2012年度までは年10回の定例会を行っていた。現在は年5回の定例会によって運営し、2020年からのコロナ禍にあっても、オンラインによる情報交換を行い、研究会は継続されている。

(2) 特別講座等とその役割～日本音楽療法学会講習会等開催団体として

先述のとおり、本研究会が地道に重ねてきた定例会は170回を超える。これはクロードの活動であるが、会員外も参加できるオープンの場としては、特別例会と特別講座がある(表2)。特別例会は定例会の延長にあり、関連領域をテーマとした外部講師による研修会や会員を講師とした研修会であり、現在までに8回行っている。ここには10周年記念事業^{註2}として、会員が講師を務めたワークショップも含まれる。また特別講座は主に音楽療法の専門家によるものであり、そのほとんどを県外(関東・北海道・岐阜など)から招へいた講師が講演やワークショップを計15回行った。また、他団体との共催、共同企画はこれまでに4回行われ、うち3回は鹿児島国際大学児童相談センターとのシンポジウムや講演会である。さらに、公開スーパービジョンや事例検討会も計5回行い、その前後には表には記されていない会員・非会員に限定しない、スーパービジョンの場も提供してきた。2013年度を除いては、毎年何らかの催しを継続して実施し、これらの催しに参加してきた人数はのべ864名である。このことは、地方の小さな研究会が行ってきた活動としては、決してたやすいものではなかったと振り返る。まずは会員自らが学ぶ場を確保することを優先したつもりであったが、運営に追われ、ゆっくり受講するだけの立場が良いという会員がいたことも事実である。今在籍する会員はいずれも、県外に出かけることを思えば、運営の労力や経費の負担は軽微であると考えている。

特別講座で扱われたテーマは、特に発足当時は、地域への音楽療法の普及や啓発活動としての役割も果たそうと意識しており、年に数回を開催していた。さらに、講座後に要望が上がった声に応えようとしたことは、「Q & A」講座や「レポート・論文の書き方」をテーマとした企画が物語っている。

さらに、日本音楽療法学会「講習会等開催団体」の認定を申請し、2003年11月に登録された。このことによって、本研究会が開催した講座の受講者に対して「受講証明書」を発行することができるようになった。当時この受講証明書は、学会認定音楽療法士資格審査に申請する際、カウントできるポイントとして活用できたため、地方で学んで認定を目指す方たちにとって、本研究会が登録団体となることで得られる最大のメリットと考えていた。この登録を機に、サークルから研究会に名称変更して筆者が代表に就いた。音楽之友発行『the ミュージックセラピー』の研究団体に掲載され、2004年9月、第4回日本音楽療法学会学術大会にて登録団体としてポスター展示を行うなど、徐々に地方で活動している研究会として認知されることとなった。

(3) 活動の記録、発行物

今回本稿を執筆するにあたって資料を整理していたところ、研究会発足当時、活動の記録として発行していた会誌が見つかった。わずか2回のみでその後途絶えてしまったが、これらをめくってみると、当時の研究会の活動を思い出すことができた。毎回使用した資料と簡単な記録のみであるが、このように活動や研究の集積を何らかの形で残すことの重要性を思い知らされる。会誌としての記録を残すことができた理由としては、発足後しばらくは定例会の担当者が明確に決められてお

り、輪番で担当していたことが挙げられるであろう。この担当を問題提起者として、自分が学びたいことを会員に投げかけ、メンバー全員が資料を持ち寄る形で行われていた。第1号、第2号の会誌はこれらの資料を集めたもので、決して気負ったものではない。問題提起者や輪番というシステムの利点は、自らの取組みを何らかの形として残したいという気持ちにつながっていたと考える。そのシステムの消滅とともに会誌は発行されなくなったのかもしれない。

それでも、10周年が近づいた頃には、日頃現場で使っている音楽活動のアイディアをまとめることで合意に至った。それが『音楽療法の現場で生まれたアイディア集「音楽のごちそう」』であり、筆者が編著者を務めた。7つのカテゴリに3～8の活動が紹介されている。(表3) 筆者は「音楽という言葉で表せないものを扱っていますので、特に大事にしたい活動の「質」の部分について、未熟な私たちでは言い尽くせないジレンマの中で、妥協しながら出来上がりました。」と、まえがきの後にさらに〈おことわり〉を設けて、言い訳のようなことを述べているが、今となつては、これは欠かせない一文であったと自己評価している。音楽療法を行う上で重要な視点である。さらに、各カテゴリの扉のページを改めて読んでみると、研究会に活気を取り戻したいという気持ちが感じられる。特に巻末のカラーページには、セッションで活躍する楽器、手作りの楽器やパネル等、さらには「Aさんの楽器棚」「Bさんの楽器箱」や移動する際の車の中に収められた楽器等の写真までも掲載している。このような工夫を公開することも、実践者により分かりやすいものと願ったことと表れかと思われる。この10周年記念誌の紹介を目的としたワークショップを、会員が講師を務め3回連続で行った。(資料4)

表3 10周年記念誌『音楽のごちそう』の内容

()は紹介した活動数
まえがき
歌唱活動 (4)
楽器を使う活動 (4)
トーンチャイム活動 (4)
身体運動を伴う活動 (8)
リラクゼーション (3)
おはなしと音楽 (3)
あ・ら・かると (7)
カラーページ

4 結びに代えて

日本において2000年前後に起きた音楽療法ブームの波は地方にも押し寄せ、鹿児島県もその例外ではなかった。自身を振り返っても毎月のように県外に出かけ、研修会・講習会で学んでいたあの頃のエネルギーはどこから来ていたのだろうと、他人事のように思い返す。全国的に熱が冷めるのも早かったもの事実であるが、その理由の一つは音楽療法士の職業的自立が難しいという理由であると考える。特に養成校を卒業した若い人たちには音楽療法士としての仕事はなく、フリーで行うか、他の職業(例えば介護職や保育士)で就職して、その後職場で音楽療法の場を獲得していくという道しかなかった。また、卒業して資格を有しても、音楽療法を実践する自信はないと言う者がほとんどであった。この自信のなさは、ある意味正当な自己評価かもしれない。音楽の機能を学び、その機能が十分発揮されるように音楽を自由自在に使いこなすこと、さらに多領域にまたがる知識に裏付けられた対象者理解のもとに実践することは、決してたやすいことではない。にもかかわらず、世間では音楽療法は誰でも出来そうに思われたのはなぜだろうか。一時期のブームと呼んでよいような現象は、そもそもここに理由があったのではないか。2011(平成23)年に日本音楽療法学会認定制度暫定期間終了したことも、影響していることは間違いないであろう。それから3年後、本学短期大学部が閉鎖して鹿児島県内に音楽療法士養成施設がなくなった2014(平成26)年は、岐阜県音楽療法研究所も認

定制度終了し、ONTOMOOK『the ミュージックセラピー vol.20』で休刊、宮崎音楽療法研究会解散などショッキングな出来事が続いた。筆者も自身の中での音楽療法の位置づけを迷う中、2015（平成27）年、本学児童相談センターとの共同企画で「鹿児島島の音楽療法の未来を考える」をテーマとしたシンポジウムを開催し、筆者がコーディネーター、本研究会会員と会員以外の方にもパネリストとして登壇していただいた。パネリストは実力のある方ばかりであるから、現場は増えているとの報告であり、一部の音楽療法士に依頼が集まってきつつあると感じた。音楽療法士自身が「必要性を求められている」と感じている限り、スキルを高めるための場は引き続き必要であり、加えて多職種連携や説明責任、そのための評価の在り方などが求められているとまとめた。

筆者らの研究会が20年間続いた理由を今考えている。それぞれの会員は、高齢者領域、障害児領域など実践現場を異にしているが、自分の専門領域だけでなくどの領域も学び、さまざまな視点を持つことができている。つまり、自分の現場とは関係ないなどと思うことなく学んできた。音楽の力を信じ、他者の声に耳を傾け、自分の出来ることで奉仕しようという気持ちを持ち、そして何より実践に活かしたいと真摯に共に学ぶ姿勢を忘れない会員たちが集まっていたからだと言え、傲りだとの批判を受けるだろうか。特別講座に遠路はるばるお越しいただいた講師の先生方にも、同様の姿勢を感じて学んできた。さらにもう一点あげるとすれば、研究会が会員個々に果たした役割である。音楽という、曖昧で客観視しにくいものを扱うために、音楽療法においてはスーパービジョンが欠かせないが、常に研究会とそこに所属する会員（＝仲間）の存在がその機能を果たし、文字通りピア・スーパービジョンが継続されてきたものと考察している。これからも研究会が果たすべき役割は、この一点に尽きると考える。20年のうちにお互いが目指す方向は異なってくることは、当然の結果であり成果である。コロナ禍においては、県外まで出かけて学んできたことも、オンライン研修で受講できるようになった。学びの場の選択肢も広がった今、県内での研究会の役割はある意味終了したと言えるからである。近くの仲間と行うべきは、やはり自らの実践の評価の視点を確認することではないだろうか。

20周年を記念して、2022年（令和4）年6月26日に、元日本音楽療法学会副理事長で日本臨床心理研究所所長の松井紀和氏に記念講演を依頼している（資料5）。テーマは、原点に戻って「いま一度、音楽療法とは何か？」とした。氏の音楽療法の定義が、日本音楽療法学会の音楽療法の定義のベースとなっており、自らの音楽療法に改めて向き合う機会を頂いたと心から感謝している。筆者が常に氏に授けられてきた見方・考え方を、会員そして県内の音楽療法関係者と共に確認したい。

最後に、この研究会の「日々輝」の名前の由来について、以下の文を紹介して本稿を結びたい。



私たち自身が日々輝いて、
私たちと音楽を介して出会う方たちも
輝いてくださることを願って…。
そして、
いつまでも私たちの声が、音楽が
響き合う研究会でありますように…。

【資料】

音楽療法研究会「日々輝」特別講座
夏季音楽療法セミナー

テーマ「音楽療法の技法とは？」



講師：鈴木千恵子氏

～経歴～
 松井紀和の下で音楽療法を学ぶ。山形大学附属音楽学校、日本臨床心理研究所を経て、現在は三川大学、履正学園大、昭和音楽大学で音楽療法の講座を担当する専ら臨床活動、後援の音楽にあたる。国内外の学会で発表。音楽療法専攻所に所属。コペンハーゲン大学にてピアノリサイタル演奏。日本音楽療法学会認定音楽療法士。日本音楽療法学会評議員。主な著書に「音楽療法の実際」（牧野出版）松井紀和著。

日時：平成14年8月9日(金)10:00～12:30
 10:00～11:00 ワークショップ
 11:10～12:30 基調講演

場所：鹿児島市民文化ホール大練習室

参加費：¥3500

定員：30名（定員になり次第締め切らせていただきます。）


お問い合わせ：099-259-1074(簡答)

「日々輝」事務局：0994-87-2172(中村)

資料1 第1回特別講座チラシ
 まだ「サークル」時の活動

音楽療法研究会「日々輝」第4回特別講座
音楽療法セミナー

テーマ「体験！音・音楽の可能性Ⅱ」



～5月の同セミナーの感想より～
 音に合わせて体を動かしたり声を出したりすることから、心んに及ぼす効果のことというのを忘れていた気がします。経験だったものが少しとれました。

音楽療法に関して全く知識も経験もなかったのですが、音で人とつながることの力を感じました。

講話とつくと何だか想像っぽいというイメージがありがたがりますが、このような活動が広がってほしいなと思います。気分すっきりで、これからはがんばっていきたくて思えます。

講師：山下 恵子氏
 国立音楽大学音楽学部音楽学科、宮崎の宮崎大学大学院修士課程修了。大学院在学中より松井紀和に師事。現在、宮崎女子短期大学助教。臨床心理士。日本音楽療法学会認定音楽療法士。
 著書：「音こころをつなぐ」・ミュージックセラピー」

日時：平成16年2月11日(水、祝日)
 10:30～12:00 Aコース
 (5月のセミナーを受講されていない方はこのコースから受講ください)
 13:30～15:30 Bコース

場所：ハートピアかごしま1F 多目的ホール

参加費：一般 A¥1500 B¥2000 終日：¥2500
 学生 A¥1000 B¥1500 終日：¥2000
 (高校生受講可)

*お問い合わせ：電/FAX 0995-62-5834 (今村)
 「日々輝」事務局：電/FAX 099-228-6080 (中村)

資料2 第4回特別講座チラシ
 日本音楽療法学会「講習会等開催団体」としての初講座

音楽療法研究会「日々輝」5周年記念事業
第7回 特別講座

テーマ「音楽療法に取り入れてみたい活動」
 ～ドラムサークル＆トーンチャイム～



日 時：2007年1月14日(日)13:30～16:00

場 所：鹿児島中央公民館講堂

講 師：森田 孝一郎氏
 (ドラムサークルス・イン・クリエイティブ・リーダー)
 中村 幸恵氏
 (日本音楽療法学会認定音楽療法士、本研究会代表)

参加費：一般 2000円 学生 1500円

＜5周年記念事業のお知らせ＞

♪ 第55期定例会（特別例会）
 テーマ：「最新書『心療と生活』」
 日 時：2007年3月17日(土) 18:00～20:30
 場 所：サンエール中野教室
 講 師：田中朝明氏（鹿児島県立大学福祉社会学部講師）
 参加費：一般 1500円 学生 1200円


♪ 第5章 特別講座 共催：音楽メディアカルパス
 テーマ：「9・11テロにおける音楽療法」
 日 時：2007年4月14日(土) 前編は未定（夕方からの予定）
 場 所：鹿児島市民文化ホール
 講 師：石野 美実氏（北海道医療大学助教授、カナダ音楽療法学会認定音楽療法士）
 参加費：未定

*特別講演費もご予約の方に参加費の別割はあります。下記までお問い合わせください。
 お問い合わせ：Tel & FAX 099-228-6080 (中村) 099-244-5730 (編集)

資料3 第7回特別講座チラシ
 5周年記念事業

音楽療法研究会「日々輝」10周年記念事業
第10回特別講座

当研究会発行の音楽療法の現場で生きたアイデア集『音楽のごちそう』を中心に3回シリーズのワークショップを行います。



＜講師紹介＞
 中村 幸恵氏
 鹿児島大学附属短期大学助教授、日本音楽療法学会認定音楽療法士、鹿児島県立音楽療法研究会代表、鹿児島市市民文化ホール音楽療法研究会代表、前九州府立音楽療法研究会代表、前、松戸市市民文化ホール音楽療法研究会代表、リハビリテーション病院を中心に音楽療法を研究する日本音楽療法学会認定音楽療法士
 今村 恵子氏
 本音すみ音楽療法室 障がい児・者の実践を中心とする音楽療法室室長
 中野 恵代氏
 クリーンエコー音楽療法室 障がい児・者の実践を中心とする音楽療法室室長
 日本音楽療法学会認定音楽療法士
 福岡 聡氏
 独立行政機構研究センター 音楽療法の視点を取り入れた授業実践を行っている


講座名	ワークショップ vol.1	ワークショップ vol.2	ワークショップ vol.3
テーマ	さまざまな機能に巻きこまれる音楽活動	集団の交流を促す音楽活動	イメージを広げる音楽活動
開催日	10月2日(土)	11月7日(日)	12月4日(土)
時 間	14:00～16:30	10:30～13:00	14:00～16:30
場 所	かごしま県民交流センター スタジオ (今村邸)	鹿児島市 本音すみ音楽教室	かごしま県民交流センター スタジオ
講 師	中村幸恵・中野恵子	幸村恵子・中村幸恵	中野恵子・塩原聖子・中村幸恵
参加費	事前入金が必要です。＊開催7日前迄のキャンセルは返金できませんので、予めご了承ください。 1講座受講 2500円 (テキスト付1000円+受講料1500円) 2講座受講 3500円 (テキスト付1000円+受講料1250円×2回) ＊聴覚障害者の方は聴覚料が無料 3講座受講 4000円 (テキスト付1000円+受講料1000円×3回)		
申込み方法	① Faxかメールにて必要事項を添付し、ご住所、申し込み員数、受講回数、連絡先電話を記載の上、お申し込みください。(お電話にてお問い合わせ、申し込みも可)。 ② 申し込みを受付けたら、お申し込みの人数に合わせた参加費の振込先、当日会場の場所についてお知らせいたします。 ③ 聴覚障害者の方、空の1泊を2泊の料金でご参加ください。		
申込先 住所	音楽療法研究会「日々輝」事務局 Fax: 099-228-6080 (Fax専用) 090-4510-6030 メール: pf_jaren@ybb.ne.jp (中野)		

資料4 10周年記念ワークショップ
 会員が講師となって記念誌『音楽のごちそう』を紹介

音楽療法研究会「日々輝」20周年事業

松井紀和特別講演会


「いま一度、
音楽療法とは何か？」



松井紀和先生プロフィール

精神科医(医学博士)、日本臨床心理研究
所所長、元日本音楽療法学会総理事長。
昭和28年北海道大学医学部卒業。山梨
日下部病院、山梨大学教授、北海道医療
大学教授を歴任。昭和30年より東京武
蔵野病院内で音楽療法を実践。臨床にお
ける第一人者として知られている。
昭和52年に日本臨床心理研究所を開設。力
點精神医学に基づく精神療法、作業療法、
音楽療法、心理劇などのセミナーを主催。
「音楽療法の手引き」「音楽療法の実際」
「精神科作業療法の手引き」ほか多数

主催 音楽療法研究会「日々輝」
日時 2022年6月26日(日) 10:00~13:00
(開業:9:45~)
会場 医療法人まこと会 児童発達支援センター「なかま」
〒891-0154 鹿児島市坂之上6-23-10
(タイヨー坂之上店となり)
会費 一般3,000円 学生1,500円
申込先 各会場まで(40名限定のため)
お問い合わせ 音楽療法研究会「日々輝」今村(090-7985-0979)



資料5 20周年記念特別講演会チラシ

講師の松井紀和氏は日本音楽療法界における臨床の第一人者である。

<注>

- 1 認定制度は、当初から将来教育機関の充実および音楽療法システムの定着を持って終了し、教育機関の卒業生を対象にした認定に移行することが想定されていた。終了の条件が整うまでの期間を考慮して2003年度までを暫定期間としていたが、国家資格化や変動する社会情勢を考慮し延長したと、日本音楽療法学会は説明している。
- 2 資料のチラシでは「第10回特別講座」としているが、毎月の例会における日程をあて、会員による講師であったため特別例会として扱い、後の濱谷紀子氏による講座を第10回特別講座とした。

<引用・参考文献>

- 村井靖児『音楽療法の基礎』音楽之友社 1995
- 岐阜県音楽療法研究所監修『「音楽療法」ある軌跡』中央法規出版 2000
- 小松明・佐々木久雄『音楽療法最前線・増補版』人間と歴史社 1996
- 宮崎音楽療法研究会編『宮崎音楽療法研究会会誌第13号』2008
- 音楽療法研究サークル「日々輝」編『会誌第2号』2003